



TITLE:

京都帝國大學理學部瀬戸臨海研究所

AUTHOR(S):

駒井, 卓

CITATION:

駒井, 卓. 京都帝國大學理學部瀬戸臨海研究所. 1929

ISSUE DATE:

1929-05-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198779>

RIGHT:

京都帝國大
學理學部

瀬戸臨海研究所

京都大學
理學部瀬戸臨
海實驗所圖書

京都帝國大
學理學部

瀬戸臨海研究所

位置と交通

瀬戸臨海研究所は和歌山縣西牟婁郡瀬戸鉛山村にあり、田邊灣の南方の入口に西方に向つて突出する番所崎の根元の砂地一面を其地域とする。其東南方海岸に沿つて凡そ十三町の處に白濱あり、更に南に行く事十數町にして湯崎がある。湯崎は上代より知られた湯治場であり、白濱は之に反し數年前始めて開かれた温泉である。此二個所の間の海濱一帯、或は沙の間から、或は田の中から、或は路の傍から、或は坂の途中から、熱湯が湯氣と共に迸り出る處が多くあり、磯の岩の隙間等からも絶えず泡立つて、瓦斯の噴いてをるものが至る處に見られる。

番所ヶ崎と云ふのは維新前こゝに異國の船を見張る番所があつて、紀州藩の與力が交代に此處に詰めて居て、國禁を破つて外洋から堺浦や兵庫の湊に押入らうとする黒船を遠眼鏡で睨んだ處である。今も小高い松林の蔭に其跡の臺石等が残つてをる。

此崎の背にある平地の上に、遠く望めば黒松の緑の間に隠見する一群の赤屋根が即ち臨海研

究所の建物である。

こゝは白濱等にさほぎ遠くはないが、岬の突端に近く、最近海岸に沿うた道が開かれる迄は途中に峠なごもあり、人里から離れた一地域をなしてをるだけ、昔乍らの天然が未だ多く汚される事なく残つてをる。濱には春はハマエンドウ、ホタルカヅラ、スミレ、コケリンダウ等咲き亂れ夏はキスゲ、ハマヒルガホ、ハマオモト、ハマニガナ等一面に匂うて、草叢の蔭から兎が跳び出したり等する事は常にある。番人の飼つてをる鶏を襲うた狸をたゞき殺した事もあり、何に驚いてか雉の子が硝子窓を破つて實驗室に飛び込んだ事もある。又早春には蕨を狩り松露を堀る事も出来るし、夏は海水浴魚釣等研究の餘暇をつぶすには充分の楽しみがある。

京都大阪方面よりこゝに往く途は海路と陸路とあるが、何れも先づ田邊を経ねばならぬ。海路は大阪商船會社の客船が一日二回づつ通うてをる。その一を大阪名古屋線と云ひ、其船は比較的小さく、和歌浦より田邊迄の諸港に寄航し、速さも遅い。他大阪勝浦線は之に反し、急航と稱へて、和歌浦の外御坊に寄るのみで、時間も短く船足も速く、船は千六百噸で船室設備も良く整うてをる。

陸路は和歌山市より最近御坊迄届いた紀勢鐵道西線により、御坊田邊間には自動車の便があ

る。

海陸路とも所要時間は大差なく、和歌山より三時間半又は四時間内外で田邊に達する（汽船の寄航地は實は田邊より少し離れた文里^{モリ}である）。之より田邊灣を横切る連絡發動機船に乗るか、又は灣の周圍に沿うて走る自動車を利用して、凡そ半時間にして綱不知^{ツナシラズ}に達する（第一圖参照）綱不知より坦路白濱迄七町許、研究所迄は更に十二三町ある。白濱より研究所迄の道は最近修築せられ、自動車を通ずる筈である。

其途中瀬戸村に郵便電信局あり、所内に電話があつて京都大阪と通話する事ができる。

建物と設備

研究所の總地積は計一萬二百六坪二合五勺。之に主なる建物が六棟雁木形に立並んでをる。即ち東より西に順次算へて

官 舍	二一坪二五	(70 m ²)
寄 宿 舍	一一二坪	(403 m ²)
特別研究室	四〇坪	(132 m ²)

實習室 六八坪

研究室 八一坪五〇

水槽室 五七坪

(224 m²)

(-38. m²)

(180 m²)

外に物置等六坪七五を合せて總建坪三九六坪五ある。總て木造平家建で、官舎と寄宿舎は疊敷、特別研究室は板張床、殘の三はコンクリート床である(第二第四圖)

特別研究室(第三圖C第六圖)は研究室と住宅とを併せた如く造られ、中に洋風居室二つ、臺所、食堂等ある外廣き實驗室を含んでをる。此室は近く改造して標本陳列室に充てる筈である。

實習室(第三圖A第八、九圖)の内部は二つの大きな室に分れ、一は初年級學生のため、一は大學院及上級學生が使ふ事になつてをる。前者は窓際に連續した平卓が取附けられ、南 兩側に六名宛の席があり、後者は衝立様のもので仕切られた南北各側五個の席が設けられてをる。各室の中央に大きなコンクリートの流場を設け、海水淡水何れでも自由に得られるやうに設備してある。

研究室(第三圖B第七圖)は實習室の西側に接した建物で、内部には中央を縦に貫く廊下があり、其兩側に小さな室が合せて十ある。即ち右側に器械室、材料室、圖書室、生理實驗室、左側に四つの職員研究室と藥品室、暗室が並ぶ。器械室には顯微鏡類、計測用器械類、採集器具類等を置

き材料室には附近で採集された動植物の研究材料を保存する。圖書室には主として海産生物學に關する圖書雜誌を藏してをるが、こゝには日常の研究に必要な一般的の者のみを置く事にし必要ある毎に京都の動物學教室等より參考書を送る事にしてをる。職員研究室にはそれ〴〵實習室にある流しの小さな物が据えられてある。

水槽室(第四圖B)は研究室の更に西にあり、中は唯一室になつてをる。こゝに三つに仕切られたコンクリート製の動物飼育槽が一つあるのこゝ、南側の窓に接して卓上水族器を置く臺が二つある外、殘の場所は通俗向の標本陳列に宛てる。即ちこゝに置かれた硝子棚の中には附近の動物の著しいものゝ標本を並べて解説を附し、又周圍の壁には世界の臨海研究所の寫眞、海産動植物の掛圖等を掛けて、公衆の興味を引くやうにしてをる。

更に此室の北側には階段の下に四つの水族館式の水槽が造られ、研究用並に觀覽用の動物を生けて置く。

水槽室の地下室は海水ポンプ室で一馬力のタービンポンプを据える。其前に海水の井があり之より百九十尺の導水管が眞直に遠く海中に出てをる。井に流入つた水はポンプで汲上げられ傍の小丘の上にある二百五十石の鐵筋コンクリート製タンクに溜り、そこから配水鉛管を流下

して各室に送られる。

寄宿舎(第四圖A第一圖)は敷地の東端、門に近い處にある。東西に細長い平家で、内部は和風、職員室八疊三、四疊三、學生室十疊四、八疊四の外、食堂臺所浴室使丁室等あり、凡そ三十人許りを泊める廣さ設備を持つてをる。

外に研究所の設備として重要なものは「入神丸」(第一〇圖)と荒木前總長の命名した發動機船である。之は總噸數十九噸、長さ四十八、幅十三呎、二十五馬力のセミ・ディゼル機關を有し、帆走の設備をも具へてをる。船内には、船室、飼育槽、船艙等がある。此船は主として遠距離の採集に用ゐられ、ドレッヂ延繩珊瑚網等の採集具を具へてをる。又小舟三隻あり、何れも通常の漁船形で、其一つには發動機を据えてをる。

沿革と事業

此研究所の始めて開かれたのは大正十一年の夏である。其前年大正十年度に十五萬圓許の政府支出金が京都帝國大學に臨海研究所を創設するために充てられる事になつた中を、一部を別府地球物理學研究のために割き、殘額拾萬圓餘が瀬戸臨海研究所の建築及設備に用ゐられる事

になつた。之に加ふるに和歌山縣より五萬圓に相當する建物及物品の寄附があり、又瀬戸鉛山村より敷地の提供があつた。それで同年夏起工し、翌大正十一年春建築竣成し、同年夏期には京都大學第一回の動植物學科學生が臨海實習を行ふ事ができた。そしてその終了後七月二十八日地方の人々を招き、總長以下出張してこゝに開所式を行つた。又圖書器械等の設備は大正十一年度に完了したのであつた。

かく此研究所の設立經營には和歌山縣並に瀬戸鉛山村に負ふ處甚だ多い。又大學に於て最も其創設に當つて盡力した故池田岩治教授は、大正十一年竣工はゞ時を同じうして逝いたのであつた。

此臨海研究所設置本來の目的は云ふ迄もなく京都大學關係者の海產動植物の研究のためである。従つて主に同大學の生物學の職員學生に利用されるが、又他の諸地方の大學専門學校等よりも研究者が集る。外に動植物學科學生の實習道場として最も重要な使命がある。吾大學の理學部では動物學を専攻する學生には最短夏期二週間春期一週間こゝに來て海產動物の觀察實驗をする事が要求されてゐる。又植物學専攻の學生も春期一週間こゝに滞在して浮游生物や藻類に關する實習を行ふ。

此期間暫く俗世に絶つた學生等の生活には殆んど休日もなく、早朝より夕暮まで、場合によるに未明又は夜間まで、採集や觀察に勉める場合が多い。それだけ此割合に短い滞在期間にも得る處は頗る大である。

之等の研究者や學生等に遺憾なく材料を供給するためには、所員に近傍の動植物の種類習性繁殖期等に就て充分の智識がある事が必要である。同時に吾が太平洋岸に於て最も種類に富んだ此紀伊沿海の生物を調査する事は、吾國の斯學界の爲めのみならず、産業上にも貢獻する處甚だ多いであらう。

それで所員等は毎日研究所附近の動植物の調査を組織的に行ひ、且海洋學的記錄を取つてをる。そして其一人は日々専ら浮游生物の検査を行ひ、他の一人は其他の動物の採集に従事する。此等の標本は適當な時期に整理して、それらの専門家を煩はし研究を託する筈である。

吾が研究所に於て行はれた研究業績は時々一纏として世界の臨海研究所及海産動植物の専門家等に配布し、彼等の出版物と交換を行つてをる。

右研究所本來の事業の外に教育的方面の仕事として行つてをる事の一は標本陳列室並に水槽室を公衆に觀せる事であつて、特に夏期は常に種々の海産動物を水槽に放つて參觀者の興味を

引くやうにしてをる。それから隔年夏期中等學校の博物科教員の爲めに臨海實習會を開く。毎回多數の志望者の中より、研究所に收容し得る限りの三十名許を選抜して、十日乃至二週間の講習を行ふ。

附近の海岸と海底

研究所附近の海岸は多く第三紀の鮮新統又は中新統に屬する砂岩又は礫岩から成り、處々貝類の化石を多量に含む。これらが太平洋の怒濤の激しい侵蝕に遭うたため、頗る奇形を呈し、或は研究所の直前の海中に横はる高島の如く、中程に圓窓の開いてをるものもあり、或は江面附近の海岸にある俗稱犬尻りの鼻のやうに、岩盤の表面が凸凹參差して歩行に難澁する處もある。海中には至る處岩礁多く、其或者は暗礁となり、船の航行に甚危険で、今迄之に觸れて坐礁沈没した者も少くない。

研究所の南側の濱及白濱附近は銀砂遠く連り、又田邊灣一面は泥質の底で深さ十乃至二十尋を出でない。

かゝる地形の海岸は生物學者には絶好の採集箇所である。蓋しそれらの岩礁の蔭や裂隙の間

には多くの藻類や附着動物を生じ、魚介の類が潜んでをるし、又浅い泥底や砂濱にはそれ／＼固有の動物が棲むからである。

紀伊半島の南端潮岬に近く東々北に向つて流るる黒潮は其分流を紀伊水道に向つて送つてをる。此流の又一分流が田邊灣内に入るらしい。そのためであらう、田邊灣内の神島カシマや南部沖の鹿島カシマには共に熱帶性の植物が自生する。殊に神島にあるハカマカヅラ (*Bauhinia japonica*) は其分布の北限が此島にあると云ふ。附近の潮の干満の差は大潮で六尺、小潮で四尺五六寸である。

紀州は古來氣候温暖の處として知られてをる。一二月も平均氣温十度内外で雪を見る事は至つて少い。盛夏は平均三十度に昇るが、常に風があるので凌ぎ難くない。地方風では夏は南風冬は北西風がかなり強く吹く。

沿海の動物

紀南地方一帯の動物相に就て、特に著しい點と云ふべきは、其種類に富んだ事と、熱帶的要素の多くある事とである。

種類に富んだ點に就ては、例へば魚類の如き九州の南端より北海道の沿海までの間より知られてゐる全種類の半數以上が紀州の附近に棲むと云はれてゐる程で、従つて他の類をも推す事が出来る。又熱帶的要素の多い事は研究所附近の岩礁の上に多量の多射珊瑚類の見られる事でも知られる。實に本州沿岸ではこれ程珊瑚類の多くある處は他にない。

かやうな事情が古くは幕末の本草學者にして「水族志」等の良書を著した畔田翠山翁の如き、或は近頃紀伊沿海の魚族を調査して「紀州魚譜」を編んだ宇井縫藏氏の如き篤學者を出した所以であらう。又瀬戸臨海研究所の所在地をこゝに定められるに至つた理由である。

然し研究所は開設日尙ほ淺く、且大規模の動物調査を行ふに必要な設備を持つて居ない。それでかやうに豊富な動物の種類を残らず知る事は容易に出来ない事である。且こゝは詳しい事を述べる場合でないから、唯極めて大略を記すに止めておく。稍詳細は京都大學理學部紀要第三卷第三號及“Records of Oceanographic Works in Japan”第一卷第三號を参照せられたい。

一、無脊椎動物

沿海に産する著明の動物を種類別にして擧げると、先づ海綿類は種類も量も甚だ豊富であり、

到る處に異る種類を見る事が出来るが、此類の調査は未だ更に手を附けて居ない。唯硝子海綿類は相模洋等に比べるに、甚だ乏しいやうである。確かに分つてをるのは偕老同穴の一種 (*Euplectella oweni*) があるのみである。

腔腸動物でヒドロイドの類は甚だ多い。中にも薄桃色をしたハネウミヒドラ (*Pennaria*) 角質の骨軸を造るアフギウミヒドラ (*Dendrocoryne*) 種々のカヤの類など美しい標本が容易に得られる。

研究所附近の田邊灣に面した方面の岩礁には、處により一面に *Stephanoscyphus* に云ふものが着いてをる。これは分類學上興味のある者で、眞正水母類のポリプの群棲する者である。これの水母は囊水母類のエフアイラクラグ (*Eusithoe*) であるが、此ポリプには大きな刺胞があつて、刺されるに、皮膚が火膨れのやうになり、痛みが激しいので漁夫等に恐れられてをる。俗にイラモミ云ふ。

外洋に面した岩壁の潮の流れの急な面にはイソバナ、ウミトサカ、フトヤギ (*Euplexaura*) イボヤギ等紅や黄等色取りに美しく、水の清い底の石の上等ミドリイシ、ハマサンゴ、スリバチサンゴ (*Turbinaria*) 等の多射珊瑚類が至る處に見られる。此等の珊瑚類は熱帶地方で珊

珊瑚を造る者である。

イソギンチャクも中々種類が多い。中にも直徑尺に餘り觸手の太さが人の指程ある *Polocera* (?) や群體を造るスナギンチャク (*Zoanthus*) 等は最も著しいものである。

番所ヶ崎を西に距る二哩の海中にある瀬戸ヶ瀬ミ云ふ淺瀬にはネヂレヤギ (*Cirripathes*) の叢がある。誤つてこゝに網を引つかけるこゝ、必ずズタ／＼に引き裂かれる。

渦虫や紐虫の類、ゴカイやウミケムシ等の環蟲類何れも種類に富んでをる。ゴカイの類で夏の夕暮海面に遊び出して美しい花火のやうな光を放つものがある。岩の裂目から管に住むケヤリ等の類の紅紫黃白色様々の鰓の總が、美しく澄んだ水を透る靜かな日の光を楽しんでをるのも、南方の海岸の一美觀である。

棘皮動物ではウニは十數種も普通の者がある。中にもガンガゼ、ムラサキウニ、コシダカウニは到る處で採集せられる。殻の橢圓形をしたナガウニ (*Echinometra*) 棘の太い *Cidaris* は何れも熱帶性の種類である。

ナマコでは眞黒のクロナマコ (*Holothuria atra*) 濃紫のムラサキクルマナマコ (*Polychaeta rufescens*) 等、波打際の石の下に氣味悪い程多くかたまつてをる事がある。

甲殻類はごころでも海産動物中の最重要な群の一であるが、殊に蟹蝦の類は甚だ種類が多く、中にもイセエビは地方の漁獲物中大切なもの、中に算へられる。之に似たセミエビ、ウチワエビも珍しくない。海岸の石垣の間には時々熱帯の陸棲ヤドカリなるチカヤドカリ (*Coenobia*) が棲む。群棲海鞘や海綿を脊中に被つてをる大きなセアシガニ (*Dromia*) も採集される。タカアシガニは相模洋等より多い位で、春四月頃浅い處に來て網に引つかかる事が珍しくない。アサヒガニも大形奇異の熱帶性蟹である。シヤコの類では吾國の沿海に最も普通な種類は別のトゲシヤコ (*Squilla rapidea*) が普通に居る。

軟體動物も甲殻類と共に、種類の多い群である。此沿岸の介類は故平瀬與一郎氏が最多く採集せられたし、且地方の人の蒐集家もあるので、比較的良く分つてをる。近く吾大學の黒田徳米、瀧巖兩氏によつて紀伊沿海産貝類目錄が編まれる筈である。

貝類中産業上重要なのはアコヤガヒで、附近に二ヶ所養殖所がある。トコブシ、アワビも亦海産物として大切である。

田邊灣の泥底にはタヒラギに似たハバウキガヒ、砂濱にはシラヲガヒを産する。又海岸より少し離れた沖にドレツヂを引くこ、よくツキヒガヒが入る。チャウジャガヒの一種 (*Pleuro-*

tomaria hirasei) ナガイトカケ (*Amatea magnifica*) 及オホイトカケ (*Epitonium scalare*) は何れも珍種として貝類蒐集家の秘藏する者である。

後總類も中々種類が多いが、日本産の此類は未だ調査が一向届いて居らぬので、良く目につくものであるに拘らず、名の分らぬ物が多い。アメフラシは中にも最も普通の物である。タツナミガヒ、ヒトヘガヒ、ナツメガヒ、ウミウシの諸種、メリベ等も珍しくない。イソアワモチも大きな標本が得られる。

頭足類の中ではマイカ、アオリイカ、マダコ等普通で重要なものである。タコブネも時々漁獲される。海岸でアウムガヒの殻が拾はれる事もあるが、これは遠い南洋から多分海流で流されて來たものに違ひない。

研究所から遠くない綱不知の附近、島島等には、汐干の際ギボシムシの孔が一面にある。シヤミセンガヒも居るが割合に少い。

二、魚 類 等

前に述べた如く紀伊沿海には魚類が甚だ豊富で、種數七百に上るだらうと云はれる。之等の

中には産業上重要なものも少くない。又珍らしい新種として此地方より始めて記載されたものも多くある。然しこゝにはたゞ此等の中極めて小部分を挙げ得るに過ぎぬ。

鮫の類ではラブカが稀に獲れる事がある。アブラザメ、ネコザメは之より普通である。此等は何れも古代の鮫の生き残りであつて、殊にラブカやネコザメは吾沿海産の動物として特筆に値する程外國では珍らしい。外に鮫の類二十種、鰐の類十種許あるやうである。變り物のギンザメも冬分には可なり多く獲れる。

鯛・鰹は近海の二大水産物である。鯛は春四月が漁獲の盛り時で、明石や高砂の浦等の漁船が荒浪を犯してこゝ迄遠征し、沖合二三哩の處に陣取つて、釣や網で産卵の爲めに内海に急ぐ魚を待ち伏せする。

鰹の漁は三月の末に近く桃の花咲く頃から始まり、春の酣になるに共に忙しくなり、初夏には稍衰へ盛夏に再び盛になる。

外に種數の多いものにアヂ、スギキ、ハタ、フエダヒ、ベラ、ハギ、フグ、メバル、カサゴ、コチ、ハゼ、ネズミゴチ、の類なごある。

海岸の釣漁で得られるものにはイサギ、クロダヒ、ブタヒ、ベラ、ホウボウ、メヂナ、カサ

ゴ等、又ブダヒ、ツバメウチ、テフテフウチ、ゲンロクダヒ、キンチャクダヒ、ツノダシ、ハギの如き怪奇な色ミ形の者が多くあるのは如何にも南國の海らしい感じを與へられる。奇形のものにはヤウジウチ、タツノオトシゴは何れも三四種づゝあり、外にフウライウチ、ウミテング等の所謂總鰐類、ハコフグ、ウミスズメ、ハリセンボン等の固鰐類、マンボウの圓大なる、シヤチフリの柔長なる、イトヨリ、フリソデウチ等の優美なる、アンカウ、イザリウチの醜惡なる等魚族にも千態百姿がある。深海魚に屬するハダカイワシ、キウリエソ、タチモドキ、リウグウノツカヒ等も稀に獲られて、漁夫たちに首を傾けしめる。

何にしても魚族の多い事、そして其食膳に上るものの美味な事は都會人士を驚かせる。

淡水魚の最も著しいものとしてはオホウナギがある。普通の鰻は別種で熱帶地方に廣く分布するものであるが、吾國では九州四國より紀南地方に及んでをる。研究所より程近い富田川あたりに棲むのが其分布の最北限である。大なるは丈五六尺、周圍二尺、目方五六貫に及ぶ。

魚類以外の脊椎動物ではセグロウミヘビが時々海岸近い處でも捕られ、アカウミガメが研究所の後の砂濱に毎年初夏の夜中に産卵する。其砂の上に印した爪痕を目當に卵を掘り出して、胚を採つたり、試食したりする。

地方の記録には數百頭の鯨が田邊灣内に入つて來て、近傍の浦々を賑はした事なきが繰返し見えるが、今はさやうな事もない。

浮 游 生 物

浮游生物も種類に富み且熱帶的色彩が著しい。其最も變化の多いのは十一月頃より三四月にかけて、あつて、此間に西南の風の吹き續いた後の靜穩な日なき、美しい管水母や櫛水母浮游軟體動物やサルバ等夥しく海岸近く押し寄せる。かやうな時の研究所に居る者の心の躍るは鰯や鯖の大群の近づいた折の漁夫等の亢奮と變らぬ。

原生動物では放散蟲の *Sticholonche*, *Acanthometron* など或日の表面採集の獲物の大部分をなす位の事もあるが、前者には極めて普通に *Amoebophrya* と云ふ珍動物が寄生してをる。夜光蟲は靜かな春の海の面の見渡す限り薄紅に色づく程に現れる日が數日も續くと思ふと、風の模様でいつの間にか忽然と姿を消す事が珍しくない。

ヒドロ水母類は曾て東京大學の内田亨氏が來場研究して幾つかの新種を見出した。ハナガサクラゲ、カミクラゲ、カラカサクラゲ等其中でも美しい種類である。管水母類ではヤウラクク

ラゲ、コヤウラクラゲ、カツチノエボシ、カツチノカムリ、ギンクワクラゲ等精巧な硝子細工かと思はれる許であるが、櫛水母類のツノクラゲ、カブトクラゲ、ウリクラゲ、オビクラゲ等は蜘蛛の絲の織物のやうである。

眞正水母類では春はミヅクラゲ、アカクラゲが年により海を埋むる許に發生し、夏はタコクラゲが之等に代つて又夥しく繁殖する。タコクラゲは地方では八幡社の祭禮の頃に出る云ふのでハチマンクラゲと呼ぶ。外に美しいエビクラゲ大きなユウレイクラゲ等も時々採集せられる。

軟體動物のプランクトンにはアサガホガヒ、ルリガヒや翼足類異足類の外アチミノウミウシ(Glaucus)の獲れる事がある。

植物性プランクトンでは硅藻類や蟲藻類が種類も量も多い事はこゝばかりでないが、詳しい事はあまり専門に偏するから略する。

海 藻 類

研究所の所員なる赤塚井狩の兩氏は共に藻類學者であるので、近海の藻類はよく調べられて

をる。

藍藻類では民國で云ふ海雹菜即ち *Brachytrichia quoyi* が潮線附近の岩面に夥しく生じてをる。

綠藻類ではキツカフグサ、アナアテサ、アテサ等最も多く、アテサの類は食用とされる。イハヅタの長さ數丈に及ぶも珍らしくない。

褐藻類ではホンダワラの類最も多く、又カゴメノリ、フクロノリ、ヒジキ等、或處の岩面を蔽ひ盡して居る。外にヒロメ、アントクメ、アラメ等も著しいものである。

紅藻類には滿潮線附近の岩礁に生ずるイハノリを採つて、淺草海苔と同じやうに製して湯崎海苔の名で温泉の浴客に賣つてをる。外にフノリ、テングサも重要なものである。此等は或期間採取を禁じ一定の日に所謂蓋を開ける。

(昭和四年四月 駒井 卓述)

規 定 要 項

一、當所で研究せんとする方は生物學水產學海洋學の研究者で獨立の研究能力ある人に限る。助手學生の如き人々は適當の指導者ある時に限り當所を利用する事ができる。單なる陳列用又は販賣用の標本採集のため來所は固く御斷りする。

一、研究希望者は豫め氏名、職務、研究事項、滞在豫定日數を京都帝國大學動物學教室內當所幹事に申出で其承認を得らるたい。

一、研究中寄宿舎に泊りたい人は豫め幹事の承認を得らるたい。

右手續を経ずして來所される人は遺憾乍ら研究並に宿泊を御斷りする。

一、研究に要する器具器械類は各自に持つてゆかれない。但し研究所備付の者で御貸し、得るものもあるから、委細は豫め問合されたい。

一、研究宿泊に就ては所内で定めた規定を守り、且所員の申出に従はれる事。

昭和四年五月十日印刷
昭和四年五月十五日發行

著作兼
發行者

駒

井

卓

京都帝國大學理學部內

印刷者

須

磨

勘

兵

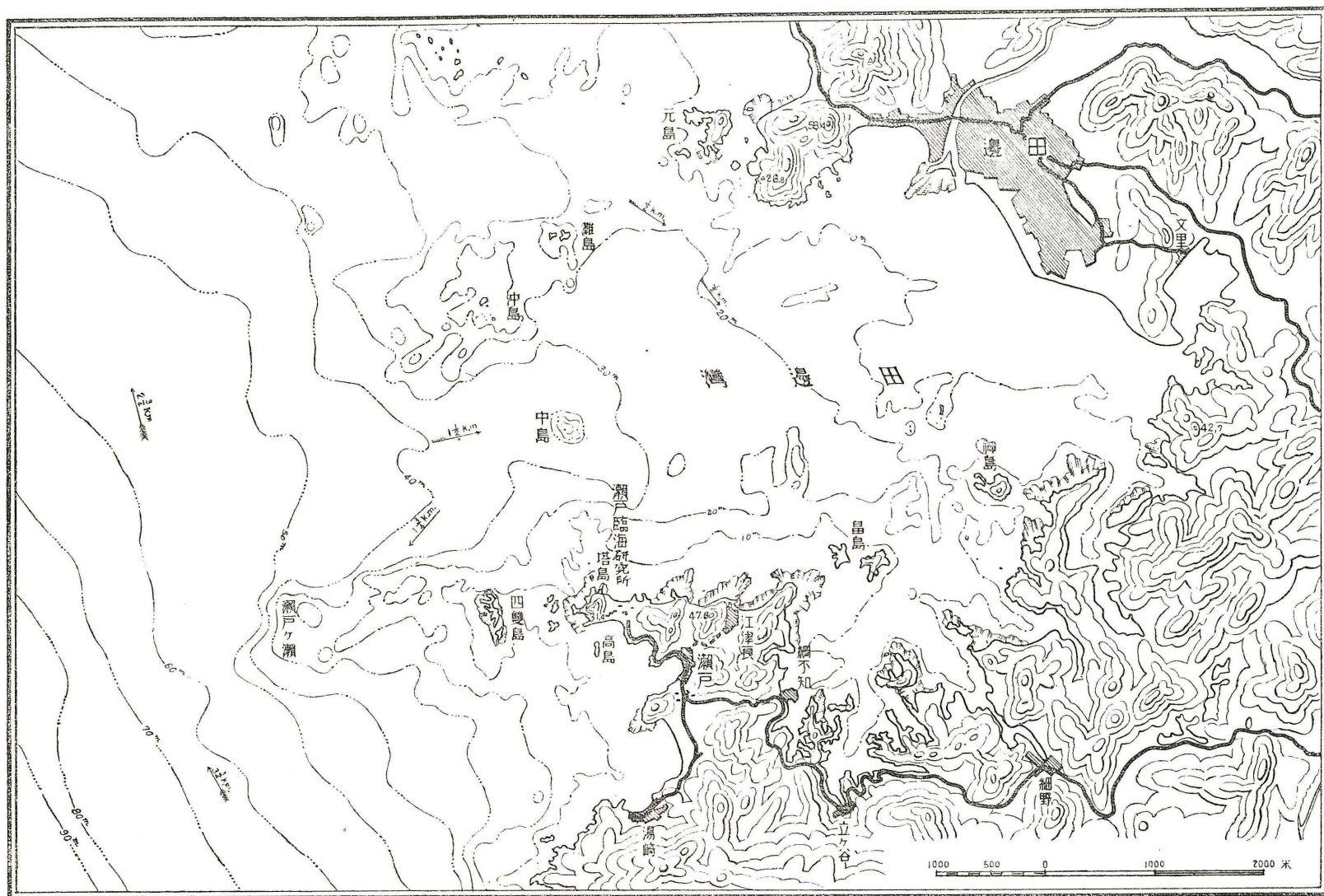
衛

京都市北小路新町西入

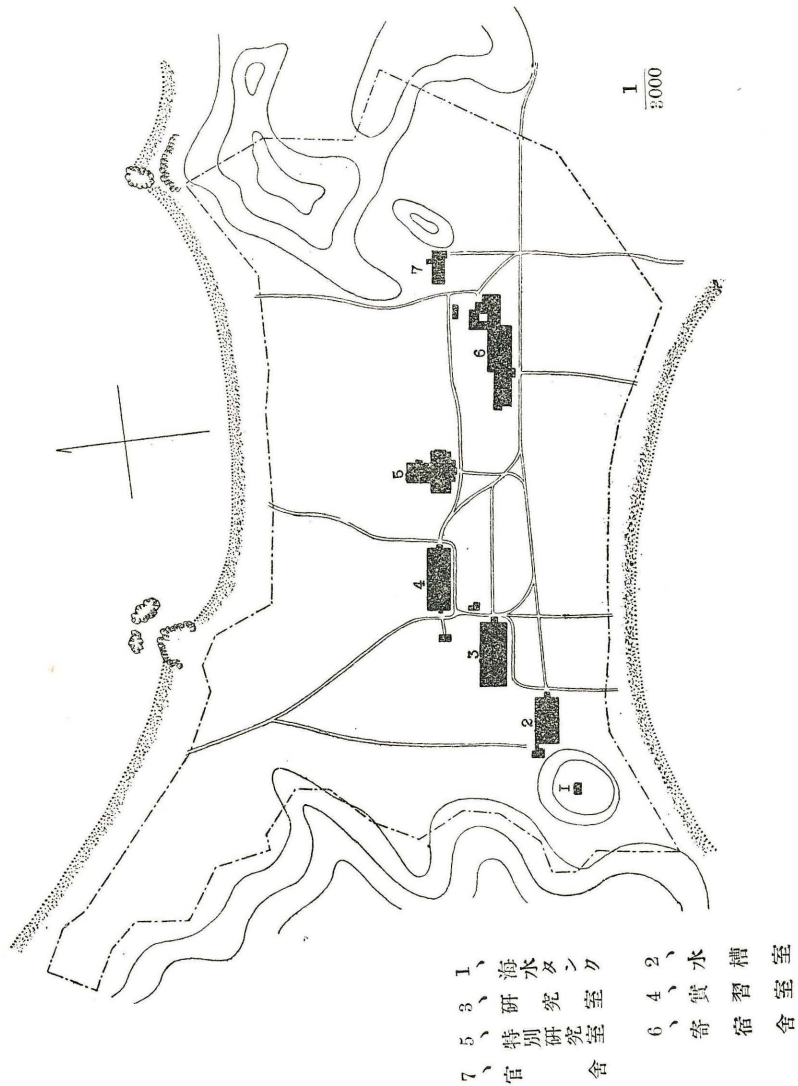
京都帝國大學理學部

瀬戸臨海研究所

第一圖 瀬戸臨海研究所附近圖

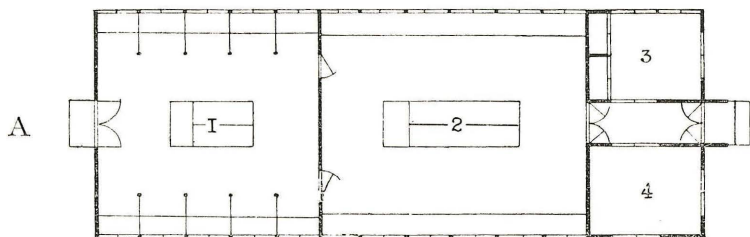


第二圖 瀬戸臨海研究所敷地



第三圖 A 實習室

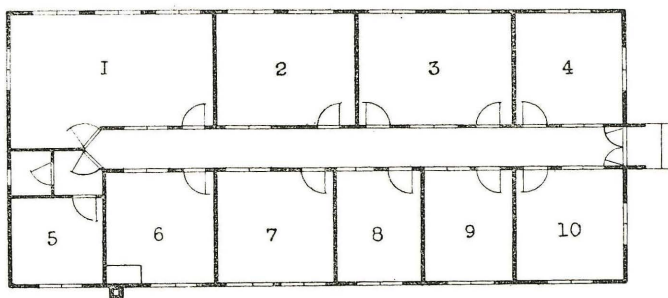
1、西
2、東



室 室

3、事務室
4、所員研究室

B



B、研究室

1、生理實驗室
2、圖書室
3、器材室
4、藥房

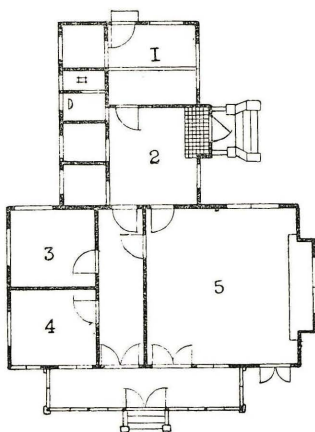
5、藥品研究室
6、暗室
7、10

職員研究室

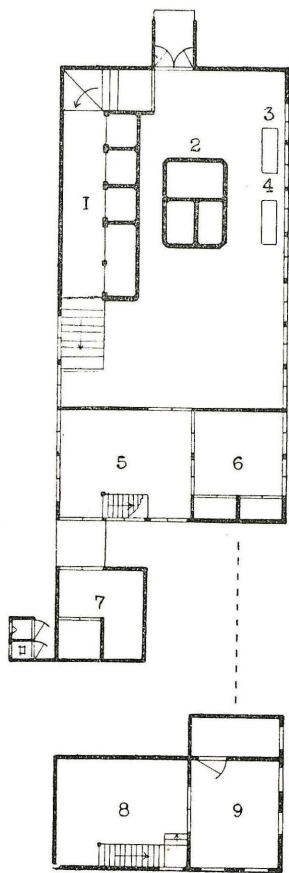
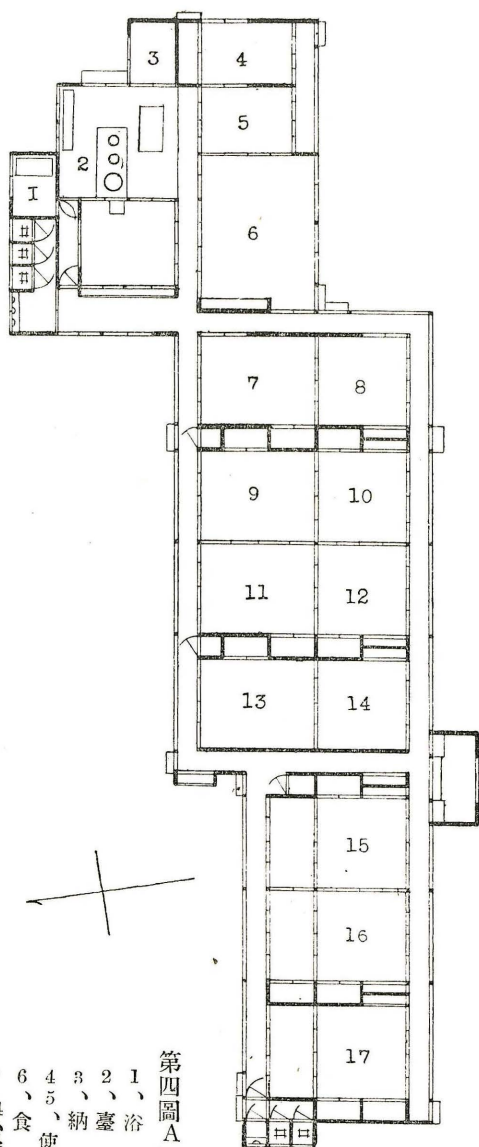
C、特別研究室

1、臺所
2、食堂
3、居間
4、研究室
5、研究室

C



1
3000



第四圖A、寄宿舎

第四圖B、水槽室

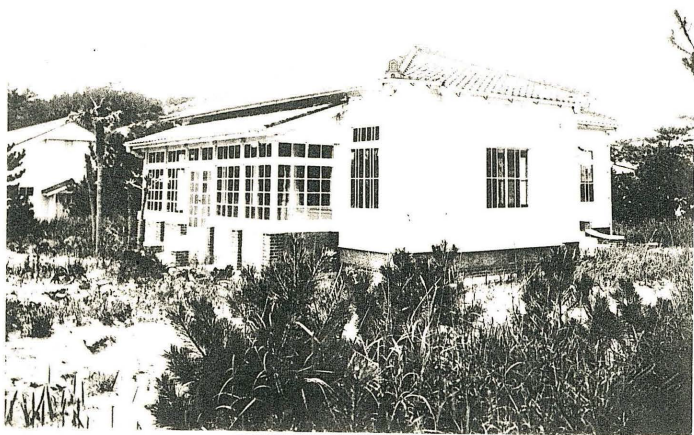
- 1、浴室
2、臺
3、納戸
4、食堂
5、食堂
6、學生室
7、職員室
8、水槽室
9、觀覽用水槽
10、飼育用水槽
11、卓上水族器
12、廣間
13、宿直室
14、物置
15、階下物置
16、ポンプ室

第五圖 番所山ヨリ見タル全景

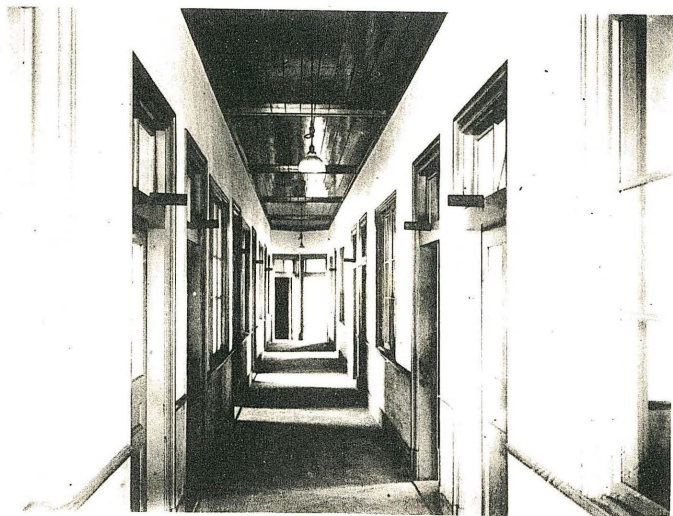


1. 實習室
2. 特別研究室
3. 研究室
4. 官舎
5. 寄宿舎
6. 水槽室
7. 海水タンク

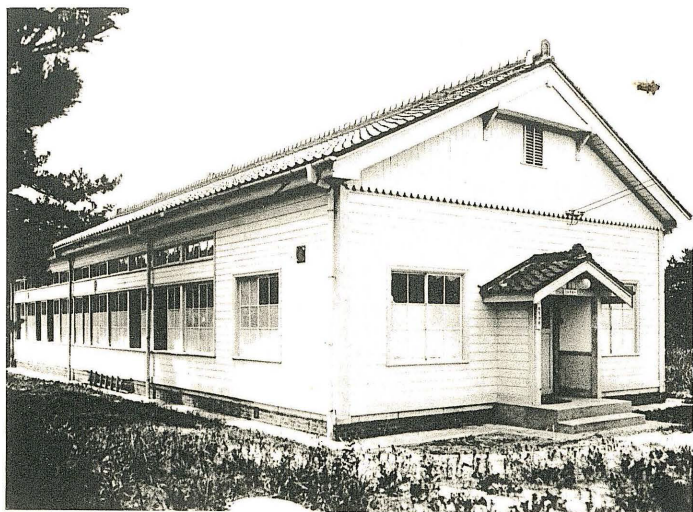
第六圖 特別研究室



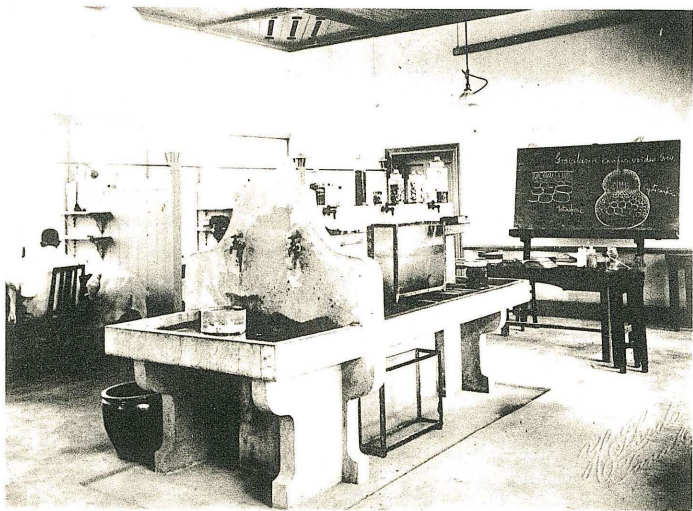
第七圖 研究室內部廊下



第八圖 實 習 室



第九圖 實 習 室 內 部



第一〇圖 南側海岸及入神丸



第一一圖 寄 宿 舍

